

ガブリエル・マルセルにおける 霊媒体験と相互主体性

藤本 拓也

はじめに

「我と汝」の思想や身体論の先駆者として知られているガブリエル・マルセル（1889 - 1973）に霊媒体験があったことは、ほとんど知られていないだろう。彼はカトリックへ改宗する以前の20代の終わりにしばしば交霊会に参加し、霊媒体験をして以降、超心理学や死後生について終生関心を持ち続けた。殊に、霊媒体験と同時期に書かれた『形而上学日記』（1914 - 23年執筆、1927年刊行）においては、神の实在や信仰に関する議論と並行して、心霊出現の仕組みや霊媒者の役割、人格の死後存続など、超心理学的な諸テーマについて考察され、そこから汝や共同性、身体などについて哲学的省察が進められている。また、カトリックに改宗した後の思想展開にも、霊媒体験の影響が読み取れる。霊媒体験の影響は、第二次大戦以後に示されることになる相互主体性⁽¹⁾の思想にも及んでいるのである。

マルセルにとり、霊媒体験は哲学的反省の具体的な基盤であったと言える。本稿では、最初の哲学的著作『形而上学日記』における心霊現象についての議論を分析しつつ、霊媒体験から導かれた超心理学的な諸テーマと相互主体性の思想との関わりについて考察していく。

なお、マルセルの主要著作はほとんどが邦訳で読むことができる。したがって、本稿でマルセルの著作から引用する場合は、基本的には春秋社版『マルセル著作集』の文章を使用している。その際、若干の訳語や表現を変更した箇所があることを断っておく。

1. 霊媒体験

『形而上学日記』第一部（1914年1月1日～5月8日）を集中的に執筆した数年後、1916年から17年にかけて、マルセルは第一次大戦の行方不明兵士の情報を家族に伝えるという赤十字のボランティアに従事した。その間、知り合いの心霊研究家⁽²⁾の家で超心理学的体験、霊媒体験をする。マルセルが霊媒となり、ウイジャ盤（文字盤）の上でプランシェット（指示器）に触れていると、心霊（spirit⁽³⁾）が憑依し意思を表示し始め、さらに、行方不明兵士の夫人が傍にいた際には、現れた心霊が彼女の夫であると証明したこともあった。この体験を報告されたベルクソンは、非常に興味を示したという⁽⁴⁾。

マルセルはこの体験以後、それまでの観念論的思考態度から「具体的哲学（philosophie concrète）」へ転換し、後に問題と神秘、存在と所有の区別を導き出すことになる。具体的哲学とは、自らの

存在を現実の身近な出来事に関わらせつつ、日常的な事柄の意味について掘り下げ反省し、哲学的考察を引き出してくるマルセルに特有の哲学的スタイルである。一見すると、心霊の实在を科学的に検証しようとする超心理学という方法論と、問題と神秘を区別するマルセルの思考態度とは相容れないように見えるが、かかる区別を明確化した講演「存在論的神秘の提起とそれへの具体的接近」（1932年）以後も、マルセルは超心理学の重要性を強調している。たとえば、第二次大戦中に書かれた第三の「形而上学日記」には、以下のような記述がある。

視霊者 (voyant) の中には、不在者の写真や肖像の仲介により、その人との交わり (communication) をはじめる能力を持っている人々がいることは疑えない。ある人々は、写真や肖像を見ただけで、モデルが生きているかいないかを言い当てるといふ説明不可能な能力を持つとさえ思われる。この大変奇妙で面食らうような事実は、経験的あるいは論理的認識の一切のカテゴリーを破壊する傾向があるために、学者や哲学者の思考が本能的にそれを回避する事実に属する。⁽⁵⁾

さらに、マルセルは最晩年の自伝においても一章を割いて自らの霊媒体験を回顧し、「超心理学の研究は信仰の予備学になりうる⁽⁶⁾」と述べている。マルセルにあって超心理学は、神秘へと接近する一つのアプローチとして、晩年に至るまで重要なテーマであったことが看取されるであろう。

若年期の霊媒体験は、還暦を過ぎた後にもその影響が窺われる。たとえば、1949～50年のアバディーン大学ギフォード講演『存在の神秘』においては、相互主体性とテレパシーなどの心霊現象との関係について、次のように述べられている。

相互主体性の観念は、きわめて多様な方向に展開させられよう。……既にキャリントン⁽⁷⁾も完全に明らかにしているように、テレパシーというものは、汝自身 (Toi-même) と自己自身 (Soi-même) という二つの言葉が別々の二つの核 (noyaux) ……を示すものではなく、なるような領域の存在を認めないでは、到底考えられない。⁽⁸⁾

ここで述べられているように、相互主体性とは、ある空間内で自己が任意の他者と共に存在している際の在り様を意味しているのではなく、テレパシー現象に見られる如く、たとえ遠く離れていても成り立つ心の交わり、相互に相手を思い、相手の存在をありのまま受け入れることにより生じるような心的・霊的な共同性 (communion) を示している。次章では、マルセル初期思想において相互主体性がいかに描き出されているかについて、第一の『形而上学日記』における視霊 (voyance) に関する記述をもとに検討することとする。

なお、一般的に視霊者 (voyant) は心霊を見る能力を持つ者、霊媒者 (médium) は神霊、死霊、生き霊など、言わば霊界と人間との間を媒介する能力を持つ者をさす言葉である。だが、マルセルの論述においては、両者の差異が必ずしも明確に区別されて論じられているわけではなく、交霊会で視霊者が依頼者自身の心霊を見る現象と、霊媒者に心霊が憑依する現象とが、どちらも「超心理学的現象」という名称で呼ばれている。霊的存在と人間とを媒介する霊媒者のうち、殊に心

霊を見る場合に限り視霊者と記され、その他の場合は一括して霊媒者とされているように受け取れる。尤も、霊媒者のうちに視霊者を含めるかどうかの妥当性や、視霊者と霊媒者それぞれの定義については、別の角度からの吟味を要するであろう。だが他面で、視霊者と霊媒者の差異を明確化したところで、マルセル自身に表記の揺れがある以上、マルセルの著作の分析にとってさほど有益なこととは思われない。ゆえに本稿では、依頼者と心霊との媒介 (médiu) として働くものについては、広い意味での霊媒者 (médiu) と理解し、そこに視霊者を含めることとして、以下の論述を進めていく。

2. 過去 - 主体と心霊的環境

まずは、第一の『形而上学日記』での心霊現象に関する論点を整理しておこう。

- ①心霊の出現は、証明されうるものではない。
- ②彼岸 (死後の世界) でも人格の区別は消滅しない。もし消滅するならば、心霊との交わり (communication) は不可能である。「人格の死後存続 (survie personnelle)」は彼岸との交わりを可能にする。
- ③心霊は、物理的対象でも生者の内的イマージュでもない。
- ④視霊、予言、降霊の技術や潜在能力 (virtualité) を霊媒者のみが特権的に保有するということは否定される。身体的存在である限り、全ての人が霊媒者ないし霊媒能力 (médiurnité) の可能性を有する。

では、第一の『形而上学日記』に頻出する視霊、人格の死後存続に関する記述を検討していこう。

視霊現象において専一に問われるのは、心霊の人物確認 (identification) である。つまり、現れた心霊は依頼者が呼び求める「汝」であるかという同一性 (identification) が問われている。だが、心霊の同一性への問いは単なる確認にとどまらない。心霊の同一性を問うことを通じてマルセルは、人間個性の限定を超えた人格の未分 (indistinction) や、人格の死後存続について考察を展開するのである。

たとえば1919年2月22日の日記では、視霊者は「私の代わりに私のことを想起する。彼は私の記憶に参加している。……私の過去は視霊者の過去となる⁹⁾」と記される。ここでは、視霊者は自分のものとなった依頼者の過去のある瞬間に注意を集中させることで心霊を呼び出す、という仮説が提示されるのであるが、しかしこの仮説は後に退けられることになる。心霊が生者に対していかにして出現するか、というように心霊現象の仕組みを解明することがこの時期のマルセルにとって重要な主題であり、この主題をめぐるマルセルの論述は新しい仮説の提示と検討、及びその否定を繰り返している。

1920年10月にも、心霊の同一性確認と過去との関係が集中的に問われている。ここでは、自己の過去と他者の過去とが相互浸透する「過去 - 主体 (passé-sujet)」という仮説が示される。「過去 - 主体」という語は、過去と不可分な主体の性格を強調したものと理解できるが、記録手段や

保存場所などの問題と結び付きうる「記憶」という語ではなく、出来事としての意味合いが強い「過去」という語を使用したところに、ベルクソンの記憶論から離脱しようとするマルセルの努力が窺えるであろう。過去 - 主体において、過去は自己自身でありつつ（私は過去である）、同じ経験を共有した他者の過去と相互浸透しようと想定されている。

〔視霊者が〕他人において見るとは、他人を想起すること、他人となることである。それゆえ、……過去 - 主体が部分的に解放され、分割されることができなければならない。だが過去 - 主体が他人にとって分割されるとはいかにして可能であろうか。私は視霊者 (voyant) のところへ行く。視霊者は、私の生に現実に混じり合っていたが、その者について私が考えたことのない存在者たちについて、私に物語る。何が起きたのだろうか。これらの存在者たちは現実に私の過去 - 主体の一部をなし、言わば、かれらは私自身である。他方、人物確認への意志がさまざまなかたちで霊媒者 (médiu) と私の双方において発生する。この種の共同的認知がなければ、視霊は起こらなかつたろう。過去 - 主体は移動しないし、視霊者の中に移らない。視霊者は過去 - 主体に参与され浸透される (pénétrer⁽¹⁰⁾) のである。あたかも過去 - 主体が自らの前に開かれている様々な道によって解放されるように、視霊者の一時的な脱現実化 (désactualisation) の状態が彼を拘束されていない (disponible⁽¹¹⁾) 状態にするのである。であれば、過去 - 主体と私の身体との関係は厳格なものではないのである。⁽¹²⁾ ([] 内引用者)

ここでは、依頼者の知らなかつた心霊 (= 「存在者たち」) について視霊者が物語るという状況が想定されて議論が進められている。マルセルはその際、「私の過去 - 主体」が視霊者に「分割されている」のではないかと仮定する。依頼者の過去 - 主体が視霊者に分割されるためには、依頼者の過去 - 主体に対し視霊者が浸透可能でなければならない。だが注意しなければならないのは、過去 - 主体とは「脳に保存された記憶」のように実体的なモノとして考えられているのではないということである。ゆえに、これらの心霊は「私の過去 - 主体の一部」であるが、他方で過去 - 主体は「移動しない」「視霊者の中に移らない」、「視霊者は過去 - 主体に参与され浸透される」と述べられる。心霊が視霊者に直接働きかけるのではなく、心霊もその一部であるところの過去 - 主体が想定され、視霊者は過去 - 主体に「浸透される」ことで心霊を見ることができると予想されるのである。マルセルは心霊の実在性を否定することなく、他面で、心霊の直接的働きかけという素朴な実在論的説明とは別の説明体系を求めて、サブリミナル (潜在意識) 説に類似した過去 - 主体という作業仮説を示していると言えよう。

以上の議論の文脈とは別に、いささか唐突に「人物確認への意志がさまざまなかたちで霊媒者 (médiu) と私の双方において発生する。この種の共同的認知がなければ、視霊は起こらなかつたろう」といった覚え書き的な記述が挿入されている。前後の文脈から考えると、この「霊媒者」という語は視霊者のことをさしていると読み取れる。したがって、上記の引用部全体で、視霊者と霊媒者という二つの語が同じ人物に対して使用されていることになる。このことに注目すると、前述のようにマルセルにおいては霊媒者と視霊者の二つの語が明確に区別されておらず、また視霊者といった場合に、広い意味での霊媒者として受け取られているということが窺われる。

そしてここでは、「人物確認への意志」が視霊者と依頼者の双方に発生するというところに心霊出現の原因が帰されている。死者への共同での伝達意志や呼びかけが、心霊の出現を促すものとして捉えられていることが看取されるであろう。

見てきたとおり、マルセルは視霊現象を可能にする主体の在り様を過去 - 主体として示し、視霊者の脱現実化を、過去 - 主体による「浸透」と捉えている。視霊者は自らの身体に拘束されていない (disponible) 状態で依頼者の過去 - 主体に浸透することにより、心霊を「現前するもの (le présence)」として見るのできるのである。このように、霊媒としての視霊者は、一時的に自己から離脱 (脱現実化) し依頼者の過去へ浸透する者として把握されている。尤も、以上の分析のみでは、霊媒としての視霊者がいかにして自らの身体の物理的境界を透過して依頼者の過去 - 主体と交わるのか、その仕組みが不明なままである。視霊者が心霊を見ることができるとするには、身体を主体の物理的境界としてのみ捉える見方を転換する必要があると思われる。

心霊現象の考察からマルセルが引き出したテーマ群は、二つに分類できる。第一には、生者が心霊をいかにして呼び出すかというように、相互主体性や汝などに関わるテーマであり、第二には、人間の身体に関わるテーマである。本稿は相互主体性について論じるものであるが、霊媒体験からマルセル思想が形成された過程を跡付けるためにも、身体論と心霊現象との関わりについて、ごく簡単に押さえておこう。

上の引用部で記されているように、「過去 - 主体と私の身体との関係は厳格なものではない」。なぜなら、霊媒としての視霊者の身体は他者の過去 - 主体に対して浸透可能でなければならないからである。ここからマルセルは、視霊者の身体が心霊と人間との媒介 (médiation⁽¹³⁾) として働いていると捉え、他方で、心霊は意識に直接現れるのではなく、視霊者の身体の媒介により心霊の意志が伝達されると想定する。こうした霊媒としての視霊者の身体に関する分析は、後に第二の「形而上学日記」(1928-33年執筆、『存在と所有』として1935年刊行)において身体一般の議論にまで掘り下げられ、身体は「存在 (ある) と所有 (持つ) の境界領域」であるという定式へ発展することになる。霊媒者 (= 視霊者) の身体の無拘束性 (disponibilité) や浸透性に関する反省が、後の身体論に繋がっていることが窺われよう。

以上で見てきたように、マルセルは過去 - 主体という作業仮説によって、自己と他者の過去を相互に含みあい浸透しあうものとして捉え直し、また、過去 - 主体という存在様態において視霊者が依頼者の過去へ浸透するという見方を示すことにより、心霊現象から相互主体的な関係性を導いたと言える。このように、過去 - 主体という作業仮説は、霊媒としての視霊者と依頼者が共存する空間に心霊が時間的な限定を超えて出現する条件である。マルセルは、続けて、心霊が出現する言わば場所的な条件を考察している。

心霊的環境 (ambiance spirituelle) という観念を明確化できるだろうか。私が正確であれば、ある特殊な状態 (situation) では、視霊者が見分ける現存者 (le présence) について私が意識できるかのように、一切のことが行われるのである。……これらの現存者はいかなる次元にいるのだろうか。現存者が対象かイマージュかという二者択一は退けるべきである。おそらく現存者たちは、主体としての私が所有する実在性と同じ実在性が投射されたものであり、したがって、イマージュに先立つ形而上学的平面 (plan métaphysique) に属しているの

であろう。心霊を見るとは、私が私の心霊的環境と現実的な関係を結ぶところの前対象的平面 (plan préobjectif) に、一挙に身を置くことであろう。⁽¹⁴⁾

マルセルはまず、視霊者が見分ける現存者について、依頼者 (=私) も意識できるような特殊な状態、心霊現象の起こる場所的状况を想定し、それを「心霊的環境」と名づける。そこに現れる現存者 (=心霊) たちは「イマージュに先立つ形而上学的平面」に属し、他方、依頼者が心霊を見るということは、「前対象的平面」に身を置くこととされる。そして、心霊的環境においては、心霊は空間的な知覚対象でも、生者の内面のイマージュでもなく、心霊が「対象かイマージュかという二者択一は退けられる」のである。ここからは、死者が過去のイマージュから解放され、同時に依頼者 (=私) も対象的な把握を事とする認識態度から離れることができるような非物理的、前対象的な場所として、心霊的環境が示されていることが窺われる。

このように、心霊的環境は視霊が生じうる場所として想定されているのだが、注意しておきたいのは、マルセルが相互主体的な共存を語る際に、環境、場 (lieu)、平面 (plan)、領域 (domaine)、地帯 (zone)、舞台 (scène)、深さ (profondeur)、共に (avec) などの語を場所的な措辞として用いながら、それによって閉じた空間を想定していないことである。殊に、1937年の論文で、マルセルは場所について次のように述べている。「場所 (place) を単なる空間的な限定と見なす不毛な抽象化をしないよう用心すべきであって、場所が性質づけられた状態 (situation qualifié) になることを認める (reconnaître) べきである⁽¹⁵⁾」。場所を空間的限定性としてのみ捉えるのではなく、そこにいる人々の存在によって「性質づけられた状態」として捉えた以上のような観点から、心霊的環境を理解することができるだろう。

見てきたように、心霊的環境は空間的な知覚対象か生者の内面のイマージュかという二分法が廃された場所として示され、そこにおいて心霊を見ることと心霊が現存することが可能になる場所である。対象/イマージュという二分法からの脱却という性格は、自己の身体の物理的境界を透過し、他者の過去 - 主体において心霊と交流する浸透性 (perméabilité, pénétrabilité) や自他の未分 (indistinction) とともに、後期マルセルの相互主体性の思想へ繋がるものである。第二次大戦後、マルセルは相互主体性について次のように説明している。「相互主体性は主体そのものに働きかけ、主体的なものはその本来の構造において既に根本的に相互主体的である⁽¹⁶⁾」。言い換えれば、相互主体性とは、世界において他者と関わりつつ存在する諸個人の存在様態そのものである。ある主体が相互主体的な在り方を選択するのではなく、主体そのものの存立が既に相互主体的なものとして把握されていると言えよう。

3. 深さ

では、後期マルセルにおいて相互主体性がいかに表象されているか見てみよう。

深いものとして私たちに与えられる思考とは、ある遠いところへの道を半ば開きかけているように思われる思考である、と言うだけではまだ十分ではない。さらに、この遠いところとは何かを問わなければならない。しかも、ここで私たちは純粋な空間的表象の枠を破るこ

とが必要である。この遠いところは他所として、すなわちある他の場所としてわれわれに感じられるのではない。むしろそれは「すぐそば」である……この遠いところは郷愁によって私たちのものだと言いたくなるような、或る領域の内部にあるものとして私たちに現れる。⁽¹⁷⁾

以上は、霊媒体験から四半世紀を経て書かれた第二次大戦中の第三の「形而上学日記」(1938-43年執筆、『現存と不死』として1959年刊行)冒頭からの引用である。ここでは、空間的表象によっては捉え切れない内在的な「深さ」の存在論的意味が問われている。尤も、「深さ (profondeur)」という言葉は一般的に空間的な意味で使われる。「遠さ」が水平的な距離であるのに対し「深さ」は垂直的な距離であるが、たとえば日本語の「深い」が技術や文意や味や人柄など、内面の深層に隠れていたもの、表面には現れない本質的なものを喩えるように、フランス語のprofondeurという語の意味も、「奥行き」「内奥」「根源的なもの」「深遠さ」など多義的であり、深く掘り下げるほど内面の核心へ、つまり「すぐそば」へ近づくという逆説が孕まれている。

マルセルはこの引用の後に、過去と未来が溶け合う「深みの地帯」を「永遠」として指し示している⁽¹⁸⁾。「深さ」や「深みの地帯」とは、時間的に離れているものが結び合う場所として想定されており、ここにおいて単線的、不可逆的な時間表象の限定性を超えた永遠性へ開かれるのである。空間的な措辞によって時間を単線的かつ不可逆的に表象してしまうことを避けるため、マルセルは「深さ」という多義的な語で時間を暗喩し、時間の空間的表象から脱却した永遠性の次元として相互主体性を表したと言えよう。

既に述べてきたように、過去 - 主体という概念には、自己／他者や過去／現在の境界、あるいは身体の物理的境界が揺らぐ存在様態を示すものとして、相互主体性の浸透的な性格が窺われた。ついで、心霊的環境には我と汝、死者と生者とが共存する相互主体性の場所的な性格として、単なる空間的限定性ではなく、そこにいる人々の存在によって性質づけられた、開かれた状態性を確認した。初期思想においてこのように規定された相互主体性の性格が、「深さ」として表象されることにより、空間的・時間的な限定性を超えた永遠としての場所、そこにおいて自己と他者の過去が溶け合うような場所として現れていると言えるだろう。

引用部冒頭において言われているように、「深さ」がそこに向けて開かれている「遠いところ」とは、決して触れられず到達できない「他所」を意味しているのではない。それは、自己が今いる此処ではない他の場所、自己にとってよそよそしい「他所」として感受されるのではなく、自己の「すぐそば」として感受されるものである。そして、「深み」を孕んだ思考は、近しさや郷愁と共に想起されるような「遠いところ」へ通じているのである。「すぐそば」と感じられるような内在的な「深み」の次元が「遠いところ」へ開かれているという逆説には、マルセルにおける超越性の特徴が窺われるであろう。つまり、マルセルは自己の経験からかけ離れた抽象的な観念を超越性として措定するのではなく、飽くまでも自己の存在が関わっている日常的な経験に即して思考し、超越の次元を表象したのである。「深さ」は自己の「すぐそば」として感じられる内在的なものであるが、それは閉じられた領域ではなく、個々人のうちにも現存すると捉えられている。なればこそ、「深さ」において他者へと開かれるような永遠性の領域が指し示されるのである。

第二次大戦以後のマルセル後期思想では、心霊現象の仕組みや視霊者の役割といった「超心理

学的問題」が問われることはなくなり、死者の現存が客観的に検証されえない神秘として承認されている。自らの霊媒体験から心霊の出現という「超心理学的問題」に関わりつつ、そこから汝の現存や汝との霊的な共同性（communion）を探究したマルセルは、他者や死者との相互主体的な関係性を見だし、かかる関係性に、永遠性や不死性の実現を垣間見たのである。

おわりに

哲学者としての立場から自らの霊媒体験を基盤にして汝や相互主体性、身体性などについて論じたマルセル思想の背景に霊媒体験、心霊現象、超心理学への関心が終生保持されていたことは、近代宗教思想と宗教的体験との関わりや、思想研究における宗教的体験の意味を考える上で極めて重要であり、看過されてはならない主題である。マルセル思想の方向性は霊媒体験によって大きく変化し、心霊の実在性を証明・解明するのではなく、心霊が出現することの意味を思索した。さらに、第二次大戦以後のマルセルは絶対的汝としての神への信仰との関わりで死者の現存について思索を深め、心霊や死後生についての事実問題ではなく、汝の現存や不死の哲学的意味を問うていった。マルセルの思索は、「超心理学的問題」としての「人格の死後存続」からカトリック信仰に基づく不死性の思想へ、徐々に推移していったと言えるだろう。

だが、本稿の立場は、両者の間に思想の深化を見るものではないし、また逆に、初期マルセルの超心理学的な立論を殊更に強調するものでもない。まずもって本稿の関心は、マルセル若年期の霊媒体験が後年の相互主体性の思想展開にまで及ぼした影響を読み取り、マルセルの「日記」を年代順に追うことによって、初期の超心理学的な立論と後期の相互主体性の思想との連続を確認することであった。そのため、霊媒体験と同時期に書かれた第一の『形而上学日記』と、霊媒体験から四半世紀後に書かれた第三の「日記」双方の記述を分析した。

マルセルにおける相互主体性とは、生きている者の間でのみ成り立つ関係性ではなく、生者と死者の交わりも含意している。さらに後期マルセルの思想を辿っていくと、相互主体性の思想には、魂の不死性への信仰が絶対的汝（神）への信仰に支えられるという構造を有することが看取される。フッサールに発する現象学における相互主体性とは、複数の意識への世界の現出が同一の客観的対象であることを説明するための概念であったのに対し、生きている主体のみならず死者と生者の関係性や、さらに神と人間との関係性をも含意しているマルセルの相互主体性の思想は、マルセル自身の霊媒体験から展開された独自のものと言えよう。覚え書きのように記されたマルセルの思索を辿り、その思想的内容の深さを明らかにしていくことは、いささか厄介な作業であるが、そこには宗教思想として改めて読み直されるべき主題が豊かに孕まれているのである。但し、絶対的汝の性格や神の位置づけについては慎重な吟味を要するため、本稿では詳述しなかった。この点については、稿を改めて別に論じることとしたい。

註

- (1) 相互主体性と超越者との関係についてマルセルは、霊媒体験から四半世紀以上が経過した第二次大戦中の論文（Gabriel Marcel, *Homo Viator*, p.212（『旅する人間』198頁））において、汝の不死（immortalité）を証しする汝への愛は、神に支えられた普遍的コミュニオン（communion universelle）を要求するということを述べている。相互主体性は「普遍的コミュニオン」という現実的、具体的な形をとりつつ、神に支えられるという思想である。マルセルは、神を絶対的汝（Toi absolu）として表し、神に支えられた相互主体性において、死者の現存や汝の不死性を考察している。本稿では、霊媒体験がマルセルの相互主体性の思想展開に与えた影響を分析するものであり、相互主体性と神との関係については、別に論じることとする。
- (2) マルセルは晩年の自伝において、この心霊研究家がルネ・ダヴィッツという女性であることを明らかにしている。だが、彼女がいかなる背景を持つ人物であるのか、カルデック以来のフランス・スピリティズムの影響があるのか、あるいはベルクソンやW・ジェームズが関わったことでも知られる心霊研究協会（SPR: Society for psychical research）のような超心理学（心霊研究）の流れに属する人物であるのか、詳細については不明である。なお、*En Chemin, vers quel éveil*という題で1971年にガリマール社から刊行されたマルセル晩年の自伝は、現在では日本のみならずフランスでも入手困難な状態にあり、本稿では邦訳書（『道程——いかなる目醒めへの？』、服部英二訳）のみ参照したことを明記しておく。
- (3) 霊的存在については、基本的にspiritという英語が使われている。
- (4) マルセル、『道程』93頁
- (5) Gabriel Marcel, *Présence et Immortalité*, p.64（『存在と所有・現存と不滅』326頁）
- (6) マルセル、『道程』95頁
- (7) テレパシー研究の権威であり、死後存続する人類魂の概念を提示した、心霊研究協会会員 Whately Catingtonのこと。
- (8) id, *Le mystère de l'être*, t1, pp.197-198（『存在の神秘』187頁）
- (9) id, *Journal métaphysique*, p.163（『形而上学日記』248頁）
- (10) 「浸透する（pénétrer）」という語について簡単に押さえておこう。「浸透的／浸透性（perméable/perméabilité, pénétrable/pénétrabilité）」という概念は20年ほど後に多用されることになる。たとえば、1937年の論文「状況内存在についての現象学的概要」では、他者からの影響を受ける状況内存在の性格の一つとして、非凝固性（incohésion）、受容性（réceptivité）、無拘束性（disponibilité）といった概念と共に示される。この論文では、自己を他者を開くこと（s'ouvrir à）としての受け入れること（recevoir）や、他者への呼びかけ（appel）、それに対する他者からの応答（réponse）など、マルセル思想における相互主体性の特徴が示されている。
- (11) disponible/disponibilitéとはマルセルの鍵語であり、通常、「随意的／随意性」「処分可能な／処分可能性」などと訳される。disponibleという語の本来の意味は、あるものが拘束されていないために「自由に利用できる」状態のことであるが、マルセルはこの語に独自の意味を与え、自己の身体がindisponible（自由に利用できない、意のままにならない、拘束されている）であることを人間存在の根本的条件とし、ここから独自の身体論を展開している。disponibleに関わる語群を日本語

に当てはめようとする、フランス語に固有の多義的な意味合いが薄れてしまうが、本稿では *disponible* を文脈によって「拘束されていない」「無拘束的」と訳し分けることとする。

- (12) id, *Journal métaphysique*, p.243 (『形而上学日記』378頁)
- (13) *médiation* という語には「仲保」という意味もある。
- (14) id, *Journal métaphysique*, p.245 (『形而上学日記』380-381頁)
- (15) id, *Du refus à l'invocation*, p.126 (『拒絶から祈願へ』96頁)
- (16) id, *Le mystère de l'être*, t1, p.198 (『存在の神秘』187頁)
- (17) id, *Présence et Immortalité*, p.30 (『存在と所有・現存と不滅』291頁)
- (18) 「過去と未来は、深みのただ中において結合すると言えらる。その深みの地帯と私が現在と呼ぶものとの関係は、絶対的な此処と偶然的な此処との関係である。そしてこの地帯において、今と当時とが、近いところと遠いところのように、融け合ってくる。この地帯こそは、疑いなく、我々が永遠と呼ぶところのものである。」 id, *ibid*, p.32 (『存在と所有・現存と不滅』293頁)

参考文献

- Marcel, Gabriel. *Journal métaphysique*, Gallimard, 1927. (=1973, マルセル著作集1『形而上学日記』, 三嶋唯義訳, 春秋社)
- *Présence et Immortalité*, Flammarion, 1959. (=1971, マルセル著作集2『存在と所有・現存と不滅』, 信太正三他訳, 春秋社)
- *Du refus à l'invocation*, Gallimard, 1940. (=1968, マルセル著作集3『拒絶から祈願へ』, 竹下敬次・伊藤晃訳, 春秋社)
- *Homo Viator*, Aubier, 1944. (=1968, マルセル著作集4『旅する人間』, 山崎庸一郎他訳, 春秋社)
- *Le mystère de l'être*, Aubier, 1951. (=1977, マルセル著作集5『存在の神秘』, 松浪信三郎掛下栄一郎訳, 春秋社)
- *En Chemin, vers quel éveil*, Gallimard, 1971. (=1976, 『道程——いかなる目醒めへの?』, 服部英二訳, 理想社)
- Tilliette, Xavier, *Paul Ricoeur et Emmanuel Levinas. Jean Wahl et Gabriel Marcel. Présentation de Jeanne Hersch*. Paris, Beauchesne, 1976.
- Tsukada, Sumiyo. *L'immédiat chez H. Bergson et G. Marcel*, Louvain-la-Neuve, 1995.
- 小林敬, 『存在の光を求めて』, 創文社, 1997年
- 「汝, 死ぬことなからん (Tu ne mourras pas)」, 『基督教学』第37号, 北海道基督教学会, 2002年
- 「実存から告白へ」, 『哲学研究年報』第37輯, 関西学院大学文学部哲学研究室, 2003年
- 上石学, 「ガブリエル・マルセルの思想における劇作の意義: 自己と「間主体性」の把握を中心として」, 『美學』49, 美学会, 1998年

The Influence of the Experience of Spiritual Mediums on G. Marcel's Thought

Takuya FUJIMOTO

The French Catholic philosopher Gabriel Marcel (1889-1973), noted for his body-mind theory and concept of "I & thou" is known to have had experiences involving spiritual mediums in the days of WW1. His style of thinking is converted from idealism to so-called "philosophie concrète" by these experiences, and his interest in meta-psychology is maintained throughout his lifetime.

Marcel's early work *Journal métaphysique* (1927) contains many pages concerning these experiences, meta-psychology, and the survival of personality. In these pages, he analyzes how the spirit appears to the living and why spiritual medium is essential to communication between the dead and the living. Marcel ponders on the role of spiritual mediums and his musings lead him to his body-mind theory afterwards. Marcel's early speculation on spiritual mediums and the medium's body also bear great influence on his later thought, especially on the concept of "intersubjectivity," which is comes to light after WW2. Although the concept of "intersubjectivity" originally derives from Husserl's phenomenology, Marcel infuses the concept with his own unique meaning. In order to explicate Marcel's "intersubjectivity," I examine the following three concepts apparent in his thought: "passé-sujet," "ambiance spirituelle" and "profondeur."

I begin by outlining the concept of "passé-sujet," which is a compound of "past" and "subject," meaning a modality of coexistence and a situation where the pasts of different subjects interpenetrate. So "passé-sujet" can be interpreted as a situation, where clairvoyants (= spiritual mediums) penetrate the other pasts and see spirits. "Ambiance spirituelle" in contrast stands for a kind of a place where spirits can appear and where people can see them. Marcel then depicts an infinite space, as it were, a place of eternity and immortality by the French word "profondeur" which means depth. Thus I demonstrate that Marcel's concept of "intersubjectivity" does not only mean a relationship between the living, but includes a relationship between the dead and living. In this paper I carefully consider the concepts derived from his experience of spiritual mediums, and attempt to elucidate the fundamental nature of his thought on "intersubjectivity."